えんのスタッフとの交わりから感じていること

堀ノ内病院地域医療センター長・副院長
堀越洋一（暮らしネット・えん理事）

昨年度はえんの方々と交わる機会が増えました。そうした交わりを得た方々から感じているのは、えんのスタッフは、ひととの関わりの過程でご自身の心をずいぶんと使っているということです。相手の喜びや苦労を自分ごととしている、正直に人の死を恐れている（わかったふりをしていない）、人と触れ合う体験を喜びつつも、その人の変化に一喜一憂している、などです。こうした印象を私なりに一言で表すと「人間的」であるということです。考えてみれば、えんはNPOですからその構成員が人間的であろうとするのは本来的なことなのかもしれません。もしかしたら、えんというNPOで働くことを選ぶときに、人間らしくある、とか、自分らしくある、という思いがあったのかなとも想像しています。

具体的なエピソードをふたつご紹介します。

「ヘルパーさんたちが『地域で共に』を大切にしているのはなぜですか」と問うたら「私たちも同じ地域に住んでいます。だから利用者との関わりは介護を通してだけでなく、季節の行事も災害時の備えも人ごとではなく、えんだけのことでもなく、地域で共に、なのです。」この答えを聞いて、「地域で共に」はキャッチフレーズでなく、一人ひとりに生きられている言葉なんだと腑に落ちました。このときも、人間らしくあること、を思いました。

若年発症の認知症の方が示した紙片をえんの方が分かち合ってくれました。「①これからどうなるのか？　②これからどうしたら良いか？　③これからどうするか？」。答えるのが難しいこれらの問いを、「共に考えましょう」と誘ってくれる姿勢は、いかにもえんらしい。こんな風にして私は少しずつ、いつの間にかえんとの関わりを深めていることに気づいています。

えんの庭の花

６月１６日第１７回定例総会